

国事執筆者の映像 (二)

要 旨

前稿に登場した落合直亮は明治の国文学者、歌人落合直文の父であるが、本稿に述べる権田直助、藤川三溪とともに多くの著述をのこしている。幕末から明治にかけて尊王攘夷家が丹念に記録をのこし、文章をものしている理由について本論で若干の考察をしたい。

かれらは維新の表舞台で活躍した雄藩の出身でないから、働いたわりには、戦後の生活は恵れなかった。また自ら売り込んで猟官運動をするほどの厚かましきもなかった。

もつとも、晩年になって権田や藤川の尊王運動の語り口が、おおげさになったのは国家の処遇にたいする反感があったのかもしれない。

革命期にはこのような中級の運動家は、御用済になれば、使いすてになるのは、いつの時代でもおなじである。自分の望むところに働き、著述に励むことのできたかれらはまだ幸福といってよい。多少の感慨をもって、かれら国事執筆者の生きざまを追ってみた。

安 藤 良 平

はじめに

前稿で幕末維新に活躍した落合直亮の口述速記をとりあげ、その業績にふれたが直亮と尊皇活動に生死をともにした権田直助の伝記「惟神道の躬行者 権田直助翁 神崎四郎著 昭和十二年六月 阿夫利神社発行」を閲覧する機会を得、また直亮が「史談会速記録」の昭和二十六年三月十七日の項で、かれが多年にわたって筆録した維新活動の覚書を強引に借りて紛失した人物として掲げた藤川三溪の伝記「海の先覚者 藤川三溪伝 桑田透一著 昭和十五年十月 水産社発行」を手に入れた。二書とも古いものでないが、この種の書物は時勢の変転のなかで多く散逸して入手しがたく、また皇国史観が濃厚で史料として引用するには問題が多い。しかし参考文献も少いので止むを得ず、原文を引用して落合直亮との関係を念頭におきながら論述することにした。なお前書の発行、昭和十二年は、七月日華事変がおこり、十月国民精神総動員中央連盟の結成、日独伊防共協定の成立、文部省は「国体の本義」の配布、東大教授、矢内原忠雄の筆禍事件などわが国の右傾化が一段と激しくなった年であり、後者発行、昭和十五年は陸軍の北部仏印進駐開始、大政翼賛会の成立、「神代史の研究」などにより津田左右吉が起訴されるなど、まさに太平洋戦争開始の直前であった。

このような時に出版された両書が素朴な尊皇攘夷思想で一貫され、その精神高揚に一役買されたのは止むを得なかったが、それは当時の歴史

的現実であったことを忘れてはならない。ここに、まず両書の緒言をあげ、若干の批評を加えたい。

『原文は旧漢字、旧仮名遣いなので原文の意向を損しないかぎり現代用語になおして記述した。』

「権田直助翁」緒言

時代が俊傑を生むのか、俊傑が時代を作るのか、古人も家貧うして良妻を思い、国乱れて忠臣現わると言った程であるから、時代が偉人傑士を生むようでもあり、又一人の力で国が興った例としては、彼のフヒテの叫びが全独逸を緊張せしめたように、矢張り人が時代を作るとも謂えよう。彼の征夷大將軍という、名実ともに厳かめしい権力をもって、六百年間、政権までを握っていた幕府を倒し、四海万民をして一天万乗の天日を仰がしむるに至ったことは、期せずして海内の俊傑が、万世一系の皇室の尊嚴を古に復さしむる翼賛の功を完くしたからであって、それは即ち、時代が俊傑を生み、その俊傑が無造作に大業を成就したのではない。その偉人傑士その人が脳漿を絞り精力を傾注し、身命を抛って皇室の御為、御国の為めにと、新時代を作り上げたのに外ならない。

而してこの時代を作った謂ゆる維新勤王家の数あるなかには、単に幕府の専横を憤って起った人もあり、又王家の式微を慨いて難に赴いた者もあり、然も亦、そのみならず朝政を神武御創業の初めに復古し、国体の大精神を闡明せんものと、この三者を総合的に大義名分の上から大観して勤王運動に努力した人々もあって、それは平田学派系統の人々であるが、その中心を為したのは実に権田直助翁その人であった。蓋し

翁、終生の思想及び事業の核心をなすものはこの勤王運動がそれであつて、他の医術、文学は翁としては、その余技に過ぎなかつたとも言える。(中略)

徳川幕府の末期に於て純然たる古代への復帰を志した人々が平田門下には少くなかつたが、翁の如く敬虔な、殉教的の態度で古代を謳歌し、直隗の靈の精神に生き、且つ、これを実行した人はまれであつた。その一生は古医道、国文学を通して古の明るい神ながらの世界を顕彰し、暗い人々の心を開くことに終始されたのである。翁の向う所は終始一貫し、半途にして、思い立つた研究の方針を易える様なことはなく、孜孜として遺漏のない研究に没頭し、深い推理と厳密なる考査を行い、医学に国文学に時代に応じて種々なる研究題目を設定し、自己の見を確立したのである。

而してその態度も何物かに徹する不屈の気魄があり、摯実な精神が躍如としている。

随つてこの確固不技なる忍耐と信仰と能力とを傾けた一生涯を通じての成果は洵に健全なる思想の宝庫であり、不動の精神の牙城であつたことは争うべからざる事実である。それも穩かにして撓まず、あらゆる障害を黙して切り開くことによつて、始めて抱懐した目的を遂行出来たのであつて、翁の多くの著書には全精神的気魄が一貫して流れている。

(以下略)

「藤川三溪伝」の緒言

同じ四国の内でも伊予は伊達宗城、土佐は山内容堂の如き傑出した勤

王諸侯を生んで、維新史上に永く、その名を留むるとともに大衆の間にもよく知られているのであるが、他の二国はその方面では余り聞えていない。

特にその位置本州に最も近く、文化も一番早く開けたといわれる讃岐は聖僧、弘法大師生誕の地として、将又、金刀比羅宮勸請の聖域として、普く世人の知るところとなつてはいるにも拘らず、この地が勤王僧、月照の故郷であることすら知る人はまれである。

これは讃岐高松藩が徳川家親藩の一として、四国鎮守の地位にあり、藩の要職、亦佐幕に傾き、維新に際して一時、賊の汚名をさえ蒙つたことがあるためであるか、或は中央に活躍した人物がいなかつたためであるが、兎も角、その地に輩出した勤王志士について余り一般に紹介されなかつた関係からかも知れない。しかしながら讃岐の尊王思想はその淵源相当に古く、水戸の連枝たる藩主、松平家の幕下にある識者のなかには、光圀の「大日本史」に共鳴を感じていたもの少からず、「山陵志」の蒲生君平、「日本外史」の頼山陽等も来讃したことあり、その人、その著作の影響を受け、不知不識の間に尊王倒幕の大義たる観念は、心ある人々の脳裡に刻まれて、ここに幾多の隠れたる志士が生れたのであるが、その最も異色あるものは、藩主の一族たる松平左近と日柳燕石、及びここに説かんとする藤川三溪の三人であろう。

松平左近はまず措き、日柳燕石については輓近、汎くその全貌が紹介され、大衆追慕の的となつた感があるが、独り藤川三溪に至つては、未だ知る人、極めてまれで、その名さえ知らぬ者が多いのである。

藤川三溪は元來、医師であり学者である。しかし武技も亦一派をなし、天賦の烈々たる気魄は常に全身に脈搏ち、讃岐勤王派一方の頭領として、維新回天の大業に参画、功成るや敢て榮達を求めず、政治上に、經濟上に多年の蘊蓄を傾けて、その卓見を披瀝し、明治新政府に諸方策を献言するところ頗る多く、特に水産業の興すべきを常に力説して、理論を實踐に、これが範を示さんとし、遂には水産教育の必要を提唱し、自ら水産人育成の任に当りたる如き、単に一讃岐の勤王家として名を留むるには余りにもその遺業は偉大であつて、正に明治初年における政治的、經濟的の一大先覚者として、日本國民は永久にその名を銘記せねばならぬ人物である。(以下略)

兩者とも医者として世に出た後、直助は古医道の復元を志し、後、平田系惟神道を学び、国語、国学の研鑽につとめた。三溪は漢学、特に漢詩文を学び、長崎に遊び蘭学系西洋兵術を修めた。後述するように、二人は幕末維新に際して尊王攘夷運動に従い、直助は薩藩江戸屋敷浪士隊に参加し、三溪は高松農兵隊を結成し、後、奥羽征討に従つた。

もつとも、かれらの実践活動は数ヶ月で終り、(三溪は高松藩佐幕派に誣告されて六年間入獄した)明治の新時代に入るので、その活動は緒言に記された程度では、一流の尊皇活動家のものとはいひがたい。

伝記筆者はその顕彰に執して、業績をおうげさに述べがちである。たとえば、前掲「蓋し翁終生の思想及び事業の核心をなすものは、この勤王運動がそれであつて、他の医術、文学はその余技に過ぎなかつたと言える」とあるが直助の皇朝医学の研究、惟神道の体系化の努力、国文法

の整備等の多くの著述は、その生涯のすぐれた業績であつて、勤王活動に劣るものではない。著作者自身それを知りつつ、あえて時勢におもねつた発言である。

「三溪伝」の著者は濃厚な郷土意識のため、たまたま讃岐に立寄つた蒲生君平、頼山陽に筆をよせているが、この歴史上の人物の著書を三溪が読んで発奮したであろうと推定しているにすぎない。日柳燕石が大衆追慕の的になつたと述べるに至つては過褒であらう。

戦時中の史家のなかには、いたずらに美辭麗句をならべて自己陶醉するもの、自分の主観で何んでも都合よく結びつけて主張するものが多かつたのはこの類であつた。

川瀬一馬は、その著、日本文化史「講談社学術文庫版」のなかで日本の社会は昭和二十年八月十五日まで、武士の思想(江戸期の武士の精神をささえた儒学、特に朱子学の思想が、実はその主流であらうとおもふが「私記」)に支配され、政治、經濟、教育に至るまで武士の精神的影響下にあつたという説を唱えているが、かつて、政權樹立が武力によつてのみ可能であり、文武両道とは名のみで、文は武力による覇者の行為を弁護するために用いられることが多く、武力の効用を偏重する思想が國民を八百年にわたつて支配してきた事実をおもえば、川瀬一馬の著想も一面の眞実であり、これらの伝記著者が滅私奉公、富国強兵、尊皇攘夷の思想を一步ものりこえることのできなかつたのは当然であつたらう。

一、権田直助の討幕の実際運動

「権田直助翁」の第八章には直助討幕運動について左記のように述べる。

王政復古大号令の下った夜、宮中小御所に於て、王政復古に伴う将来の政治方針が討議せられた。その折も薩摩藩の主戦派はあくまで自己の主張を進言したのである。

殊に西郷隆盛の如きは、この当時江戸に於て関東の浮浪人を公然と募集していた程であった。これは関東を擾乱して内顧するところあらしめ、有事の日には関西軍と東西呼応して兵を挙げんとする準備であったのである。

この浮浪人を募集したのは慶応三年十月頃からのことで、西郷の命に従った者は薩摩留守居役篠崎彦五郎、益満休之丞(助)及び伊牟田尚平等であった。(中略)

この薩摩屋敷の頭取(浪人隊の責任者)は相良総三(小島将満)、副将格、水原一郎(落合直亮)、大監察、刈田積穂(権田直助)が居られ、浪人の牛耳を執った。(中略)この糾合方を組織した主なる人は小島、落合、権田、小川(節齋)伊牟田、益満の六人である。

翁がこの糾合方の大任を委任された経緯は外でもない。関東の地理、人情に精通した上に手腕の点から言っても申分なく、又志士の間に徳望者として認められていた翁のことであるから、この大任を達て委託され

たのも蓋し当然のことであった。続己亥叢説に載する井上頼圀翁の談によると、権田先生を薩摩の屋敷に引込んだり、何かしたのは落合がやったことだと述べて居られるが、事実、落合氏が翁の許に来て、国家の為にこの浪士相手の運動につき十分尽力さるるよう願ったのであった。

翁はかつて京都に滞在せらるる時も、決して破壊運動には加っていないばかりか、この方面への運動は避けて主として精神方面の運動に日を送られたものであった。(中略)

此のような事を関東に起そうとする計画に就き翁がこれを委託されるに就いては、その初め西郷、岩下等の薩藩の人々と謀議したとき、西郷隆盛は多数の兵員を派遣するから十分各所に活動せられたいとのことであったから、翁も落合も小島もそのつもりで計画を立て、四方に兵を出して活動を開始したのであった。

併し形勢は切迫し、僅かの兵数では到底目星しい活動は出来なければいか、時によっては撃滅される恐れがある。

翁は約束した兵を送らぬ為め、詮方なく密かに薩邸を脱して慶応三年十二月二十日、宮西諸助を従者として路を木曾街道に取り、中津川にて宮西を返し、単身京都に上り、岩下方平と兵員派遣について種々の打合をなし周旋せられたのである。(中略)

ところが翁の奔走中、即ち同月二十二日江戸城西丸に火災があった。これも浪人の所為であると言われ、二十四日芝赤羽の庄内藩巡邏所の屯所に発砲したものがあつた。此の二件は特に幕兵を刺戟し、庄内藩家老、松平権十郎は関老水野和泉守から内諾を得、二十五日の天明を期して銃

隊百五十人、新徴組三百人を以て薩邸を包圍した。(中略)

当時、薩摩藩の人々は京都に上り、江戸には篠崎彦次郎(五カ)以下五十数名であったと言われ、糾合方の人々も、関東各地に分散して薩邸に残る者は極めて少ない。依って死力を尽して戦ったが攻勢に出ることは出来なかつた。

伊牟田尚平、小島将満、落合直亮の志士、並に浪士六十余名は脱出することに決し、邸外に突出して包圍の一角を崩し、品川に走り、碇泊中の薩藩船翔鳳丸に投じて西走し、幕艦は之を砲撃したけれども及ばず、遂に海上遙かに落ち延びたのである。(中略)

ところで翁はこの騒動がかくも早く起るうとは知らず、十二月二十八日岩下方平氏を訪れたところ、岩下氏は翁に向つて十二月二十二日の拙暁に幕兵が江戸の薩邸を砲撃した、これで、いよいよ戦争の運びに立ち至つたのである。これは全く貴君の御尽力に因ることであると云われた。これを聞いた翁は驚き、それは一体何方から聞かれたかと尋ねるや、岩下氏はそれは我が藩より予ねて入れ置いた間諜よりの密報であると言われ、そこで翁も手をうって、その画策が適中したのを悦ばれた。又西郷隆盛に面会された時にも、西郷は懇ろに翁を労つて、貴君の御尽力によって事の成就是近き中にある、と言われたと云うことである。

翁は慶応四年正月の十日頃、征夷大將軍仁和寺の宮(嘉彰親王)に供奉して大阪に赴き、尋いで四国、中国の鎮撫使、四条隆謨、錦旗奉行、五条為榮朝臣を輔けて姫路に赴き、藩主、酒井雅楽頭と折衝して其城を

収めて京都に帰るや、岩倉具視よりの内命にて再び関東内情を命ぜられた。(探索脱力)

翁(とカ)落合直亮とは大総督の宮の進発に先だつこと五日、即ち二年二月十日京都を発ち、信州須坂の堀内蔵頭家来と称して、その藩士の風を装い、早駕籠にて木曾賢川駅より分岐して桜沢山道を経て、ようやくして木曾の倉沢義髓の家に立寄つた。これは翁が余り先を急いだため、濃州大垣辺で早駕籠人夫の賃銭絶無となり、旅費尽きて如何とも出来ず、終に江戸迄の旅費を借りる為に、倉沢家に立ち寄つた訳であつた。

この木曾の平田派の人々は、翁の勤王運動に種々便宜を図つて呉れたもので、倉沢義髓は勿論のこと、この外にも嘗つて皇学の研究や歌道の交際で親しい北原稻雄、島崎正樹、片桐春一等が居つて安全の策を与えて呉れたのである。斯様に木曾在住の平田派の人々の援助の下に再び木曾を発ち、早駕籠で昼夜兼行、二十二日漸くにして江戸に入ることが出来た。

然るに江戸は慶喜を繞つて、会津の藩主松平容保、松平定敬、板倉勝静、酒井忠淳等が集り、多年の主従関係の深い恩義から京都に対立し、悲憤と殺気が漂つて居て、極めて切迫せる空氣に充たされていた。この暗澹たる殺伐な江戸であり、特に翁にとっては薩摩邸事件の中心人物であり、幕兵から注目されている文字通りの注意人物である。それにも拘らず、御国の為に働く固い信念は、翁を驅つて数日間東奔西走の労を取らしめることになり、早急に事情を探索して一般の状況を詳にし、二十日には江戸を出発して、三月三日京都に還ることが出来た。両土復命

の結果、ここに大総督の宮も漸く、江戸へ軍を進められることになった。『以上が横田直助の討幕運動の要旨であるが、落合直亮と共に薩邸浪士隊以来の盟友であった小島将満が支揮した赤報隊の事件の概要と岩倉暗殺計画を「直助翁」によって付記しておく。なおこの問題にかぎらず、落合の口述速記と権田関係の伝聞史料による叙述には多くの相違があり、それは別章で検討する。』

此の如く、翁と落合の両人は岩倉卿の委託に就いては充分その委託を遂行したが、その反面に於ては、過去に於て共に親しく国事に奔走し、同じ関東人としてその行動を共にした小島将満（相良総三）の死罪に処せられたことは翁をして心から悲痛せしめた。

小島は薩藩邸焼討事件後、京都に入るや鳥羽伏見の戦争に加わり、又この戦が終わると同時に京都を脱して、綾小路、沢野井両卿の一行と共に征討軍とは別に、部下を率いて美濃に入り部隊を官軍赤報隊と名づけ、行く行く各藩に接し、大義名分の名の下に金銭米穀を徴発した。然るに右両卿は京都からの注意により、帰洛することになり、ここに小島将満一味のみが残されたが、意気に燃えたかれは少数の一味と共に進軍して甲府の陣代を屠り、果ては暴行掠奪をして人民を苦しめた。

『戦後の官軍赤報隊の研究では、この辺から見解が異ってくる』
斯くして将満が下諏訪に到着するや、慶応四年二月十日、東山道総督府より美濃各藩に対し、小島将満の赤報隊が単独行動を以て諸藩から金穀を募り、浮浪の徒を集めて軍規を乱すに就いては、嚴重にこれを処分すべき旨の取締令が出された。（中略）

二月二十八日岩倉総督が下諏訪に到着するや、赤報隊は本陣を移した。然るに三月一日、下諏訪の総督本陣より将満に出頭命令書が来たので、かれは従者をしたがえ、本陣に行くや捕縛され、翌夕には部下の七十余名も悉く捕えられた。これを聞いた東山道軍参謀、板垣大助、^(退力)香川敬三はかれの忠誠には、一点疚しきことなきを主張し、諏訪藩預けにせらるるよう出来得る限り弁じたが、あまりに反対者が多く、この取扱は遂に無効になり、三月三日小島は斬罪に処せられて了った。これは将満の部下に対する取締が届かず、浮浪人を集合した結果、軍規が乱れ勝ちであった為、事実些細のことから死を早めたのであった。（中略）翁はこの深い事情を知らず、唯人の口から伝えらるるに知ったのであるから、単に表面的であるが、多年交情を深くしていた小島の斬罪に就いては、岩倉に対し不満が益々加って来た。此時は丁度、倉沢義髓も上京して白川家に滞在していた。翁と落合直亮とは小島の残党と共に白川家の学館に往って、倉沢義髓を始め、その他の人々にもしきりに岩倉公の非を鳴らし、かかる冤罪を以て天下忠誠の志士を失いたるは、その罪岩倉公に在り、仮令名門の公たりともこの儘には捨て置けないと、その不平不満は実に激しいものであった。

それが終には翁の部下数名の少壮者の間に公を暗殺するまでの計画に進み、形勢実に穩でなかった。依って倉沢義髓はこれを察し、地村邦則、小川清成、西川吉輔等と協議し、ここに吉輔は、岩倉邸に伺候してその事状を具申するや、岩倉公も其れ位のことにはありそうな話である。兎も角、自身権田と落合に会って話し合いたいと言われ、或る日、岩倉

公は兩人を招き、短刀一口を前に置いて、今日より余は諸君と男子の交際をしたい、諸君のうち我を刺さんとする者あれば、この短刀を以て刺して欲しい、と面色厳かに言われたに對し、翁も落合もそれに就いては一言もせず、翁は徐に取調べた当時の事情を話し、小島將滿が格段な罪悪なくして斬罪に処せられた不法に及び、公の処置に就いて不満の意を述べた。岩倉公も始めて、その裏面の事情を明にしたが、諄々と大義名分を説き、將滿の刑死は情に於て惜むべきものがあるが、金穀強奪のことは何分にも軍規の上で如何ともなしがたく、終に涙を呑んで斬に処したのであると、公としては公の苦衷を語られ、爰に雙方意の在る所が諒解され、互に融け合つて事なきを得た。

これから後は、公と翁との交情は一層深くなり、岩倉公は銘刀一口を翁に贈り、過去に於ける翁の尽力を謝すと同時に相国寺内の岩倉家の下陣に翁と落合の二人に寓居を与え、翁及び落合等、その関係者を優遇された。(中略)その後二年を経て、翁と直亮は小島將滿遺草を刊行して同志に頌ち、その英風を偲んだが、その序文は翁の筆になった。これより翁の尽力もあって小島將滿の名は永遠に人々の記憶に貽り、將滿の行績は世人に記念せらるるに至った。『本章については、三の三者の関係の章で論考する。』

二、藤川三溪の勤王活動

「三溪伝」によってその勤王活動の概要を記述する。

文久三年、孝明天皇の加茂、石清水八幡社への行幸、攘夷の祈願あり、天下尊攘派の勢が高揚した。この年四月朝廷は高松藩の松平左近(藩主頼胤の長兄、病弱のため廢嫡され、長じて文武両道に達し、夙に水戸の学風を慕い、尊王の志厚く法華經を信仰し、大雄庵という精舎を建て、修法を名として尊王攘夷の大義を説く、讃岐勤王党のかくれた首領として活躍した。)の尊皇の志篤きをきき、特に新藩主、頼聡に勅して左近を海防諮問の職に任せしめ、藩政に参与せしめた。

三溪は六月一日、左近に海防の急務を建言、郷兵を募つて竜虎隊(五百四十五名)を組織し、自らその隊長となった。かれは往年、長崎遊学の節、高島秋帆から修得した洋式陣法を以て隊員を訓練し、七月には屋島の北端、永崎鼻に砲台を築き、二十六封度白砲を新鑄して「震遠砲」と命名した。

しかし竜虎隊の組織及び砲台守備の二件は藩の佐幕派重臣の忌むところとなり、十月捕えられて鶴屋町の獄につながれ、佐幕派の家老小夫兵庫正容、小河又右衛門久成等は相謀つて三溪を獄中に刺そうとしたが、これは未遂におわつた。

慶応元年五月、日柳燕石、捕縛投獄された。これは野村望東尼の頼みで、高杉晋作を匿つた故である。この年十月、三溪は「太平秘策」を脱稿して一橋慶喜に提出を試み、以後獄中にて五回にわたつて上書したがすべて握りつぶされた。

明治元年正月、左近の奔走により燕石とともに出獄したが、前後六ヶ年、獄中に暮したことになる。この時期、藩主松平頼聡は將軍慶喜に従

い、伏見、鳥羽の戦に先鋒を承ったので戦後、高松藩は朝敵とみなされたが、出獄した三溪は問罪使として讃岐に入った土佐軍の首将深尾丹後、大軍監板垣退助と折衝して頼聡の無罪を陳じ、遂に高松藩を戦火焦土の難より救うことを得た。

高松藩救済が成功するや、三溪は上京して沢為量の家令となった。明治元年三月、奥羽征討の詔が下り、鎮撫総督に左大臣九条道孝、副総督沢為量、参謀に醍醐忠教、副参謀に大山綱良（薩摩藩士）世良修蔵（長州藩士）柱太郎（長州藩士）が任せられ、薩、長、筑三藩の兵を率いて海路、陸前宮戸浜に着き、仙台藩に入り、藩校養賢堂を総督府として、会津征討を仙台藩と米沢藩に命じ、庄内藩討伐を秋田藩に命じ、盛岡藩に支援させる方針を定めた。

しかし奥羽諸藩の意向は官軍に抵抗はさけるが会津、庄内を討つよりも請うて、之を救おうというものであった。そこで奥羽二十五藩の重臣が白河に会し、仙台、米沢両藩が主唱して会津、庄内両藩主の宥恕を願うことになり、次いで仙台に第二次会議を開き、同盟条約に調印の上、建白書を朝廷に上った。五月三日のことである。

これより先、庄内の藩兵の勢、猖獗を極むるとの報つたわり、沢副総督は大山参謀と、ともに薩長二藩の兵を率い、四月十日仙台を発し出羽新庄に至り、庄内征討の軍務を督した。ここで沢為量の家令たる三溪は後続部隊を率いて進発し、苦労を重ねて同月二十三日新庄に到着したが賊勢盛んなるに鑑み、直ちに江戸大総督に援軍派遣を依頼する使を命ぜられたが、途中にて引返し新庄にもどった。沢副総督は江戸遣使を断念

し、改めて秋田藩主佐竹義堯の説得、出兵を命ずることを三溪に依頼し、同時にかれを奥羽鎮撫府軍事役に任じた。

五月一日、三溪は秋田到着、秋田藩説得に努め、激論二日に及んだが、秋田藩は奥羽盟約を重んじて官軍の入国、出兵を承服せず、たまたま同藩士、豊間源之進なるもの同志糾合して君側の奸を清めんと申入れ、その同志は三日払暁までに百余名に及び、事、重臣の耳に達するや、重臣大いに恐れ、三溪に膝を屈して副総督は九日秋田の藩校、明德館に入ることができた。

これより先、三溪は大館の旅館で函館に渡る蕪商人のあることを知り、函館府知事、清水谷公考に宛てた江戸に救援を求めるとの密書をこれに託した。ついで副総督から能代港で漁船を求めて、松前に急行すべき命をうけた三溪は五月十八日津軽の深浦を出帆して二十日松前に到着した。松前志摩守徳広は重臣関左盛に三溪を出迎えさせ、三溪は副総督の命を伝え、汽船借用の希望を述べ、志摩守の承諾を得た。二十四日松前を出発して二十六日函館に着き、清水谷府知事と会い、奥羽各藩の反覆常ならぬ実状を説明し、その結果、江戸の大総督の直接援助を請うことに意見が一致し、二十九日汽船を雇って能代港に回航させ、自らは六月六日函館を発して十日横浜に入港、十一日大総督府へ副総督の書を奉って速かな救援を請うた。十三日参謀大村益次郎は江戸の大総督府は守兵少くして救援に赴く余裕がなく、三溪に京都に急行して岩倉公の指揮を仰ぎ、中国及び西海の兵を動かして奥羽遠征軍を救うよう三溪に指示した。

三溪即日出発、昼夜兼行して京都に上り、直ちに太政官に赴き、奥羽の急を告げ、来援を請うた。十七日岩倉公は三溪を召して奥羽征討軍監に任じ、相携えて参内、三溪は初めて、天顔に咫尺するを得た。

八月十日三溪は肥前小城の兵七百余人を率い、軍船甲子号に乗って出発、十七日秋田船州港に着いたが、薩摩、島津登も兵千余人を率いて同日船州港に上陸、官軍の勢威大いに振った。九月二十八日、大曲に賊軍を破り、長駆、庄内城に迫り、城主酒井忠篤を軍門に降した。

十月三日、三溪は奥羽監察使に任ぜられ、南部城接收に当たることになった。三溪は二十四日兵を率いて新庄を発し、十一月八日雫石駅に着くと、南部藩の家老、全軍を迎えて、三溪に会見、九日盛岡に到着、翌日三溪は南部城の点検を行い、兵器弾薬を押収、十二日藩主南部利剛、その子彦太郎、他三名を檻車に幽囚し、新庄の兵に監視させ、翌十三日南部を進発した。

南部城接收の使命を果した三溪は出発の当日大総督に書状を呈し、十二月二日東京に帰着、芝金地院に入り、南部藩主父子を軍務官に引渡した。三溪が奥羽征討に活躍した業績は以上の通りである。この期間は七ヶ月に過ぎなかったが六年の幽囚をおえて、瞬時も憩う違とてなく、東奔西走、機略縦横、以て皇威を顕揚した偉功は単にこれを地方の一勤王家として没し去るべきであらうか。

遮莫、三溪としては、この七ヶ月がその生涯における最も得意の時代であった。これから経世家としての彼、産業界先覚者としての彼、教育家としての彼の叙述に入るのであるが、俊敏無比なるその頭脳から生れ

出ずる新企画、新方策は当時に先行すること余りに早く、彼が死後五十年を経た今日に至って漸く具現されつつある状態であって、我等はただその思想の雄大、着眼の非凡なりにして驚嘆するのみである。

『三溪伝の奥羽征討を中心にした勤王活動の概要であるが、これについての批判は第三章でおこなう。ただ最後の数行、三溪追慕の筆、溢美にして最負の引倒しというべきか。』

三、落合、権田、藤川の関係

権田直助は文久二年十一月五条為栄の招きにより上京し、古医道（皇朝医学）の研究を志したが、時勢は平穩な古学研究を許さず、在京中、縉紳の間に尊王攘夷思想を鼓吹したが七卿落ちにより京都の状勢は急変、公武合体派が時運の主流となったので直助は一時帰郷のやむなきに至った。（子息が父の身を案じて上京、帰郷を説得したともいう。）

元治元年一旦帰郷後も暫く研究を離れ、勤王活動に入っていった。門弟井上頼圀談によると、「紀州浪人里見次郎という人があって、その人が落合直亮の許に来て、もはや袖手傍観して居る時ではない、京都に出て尽力せられたいと只管勧めたものである。それによって落合氏は権田先生に是非国家の為に十分尽力あらんことを乞われたのである。」

この談だけでは落合、権田の初見がいつであったか明らかでない。史談会速記によると落合は文久三年に上京して寺院封事を書いて、学習院に出しており、それより先、文久二年に権田が上洛しておるので両者は

京都において接触する機会があったかもしれない。

在京中、落合は正名断、本末論、国体原論を書き、文筆活動をして所謂勤王志士達と交際し、在京運動家に重んぜられていたようだ。

権田は平田系、惟神道の思想的立場から、その行動は実践活動でなく、精神運動に重きをおき、志士の運動には批判的であった。その権田が後に薩藩三田屋敷浪人隊に加盟したのは落合に誘導、或は煽動されたのではないか。

落合の口述速記(四月二十七日)のなかで権田の話はほとんど出ず、「始めに集りました人数のなかに権田直助と云う老人(慶応三年、五十九歳)が一人ござりました、是れは老人の事でござりますし、コチラにあつては危いと云うことで、其門人たちが申合せて竊かに人数のなから焼討前に京都に上ぼせましたのでござります。」とのべ、また浪士隊結成のくだりでも、「其のうちに、鹿児島の方で浪人を募ると云う事になりまして、其人は伊牟田尚平、益満休之助と云う兩人でありましたが、その兩人の周旋に応じまして芝の三田邸に集りましたことでありました。

其第一番に着しましたのは旧幕府旗本の酒井錦之助と云う人の家臣、小島四郎(将満)と云う人で有りました。夫れに続きまして私が参り、夫より段々集りまして、其集りました始めは慶応三年の十月の下旬で御坐りました。」(中略)「さて小島四郎は京都に於て西郷に屢々逢い、事を謀りまして、既に此間も申しました益満休之助、伊牟田尚平との二人が参りまして、人を集めますことを計画して居りましたのは、此の小島

四郎一人で御坐りまして、是は予て、承知して居った様子で御坐りました。」

九月二十七日の項によると、

「寺師君 益満の浪士を集むる事をアナタ方に通知した手続はどういうものであります。

落合君 それは能く存じませぬが、私などへの通知は小島四郎の手から来たので直接に受けませんのでござります、何れ、何んでも他にもありましたのでござりましょうが、小島四郎は早くから其計画をして、世間の有志の者にも通じました様子でござります。

寺師君 益満などの話を聞いた一番の人は小島四郎で、小島は始めから益満などは存じて居ったのでござりましょうか。

落合君 其所は能く知りませんが、何れ京都に上りまして御藩邸の方へも出這入りした様子でござりますから知って居ったでありましょう。」

この口述からみて江戸浪士隊は、この三人が中心になり、必要に応じて落合なども謀議に参加したということがわかる。権田直助は大監察という地位をあたえられたが、活動の中心人物ではない。

浪士隊の任務が徹頭徹尾、破壊運動で、翁のあまり好まぬ又不得手の仕事であつたという著者(神崎四郎)の批評は当を得ている。

しかし落合の口述が信頼できるならば「直助翁」の著者の叙述「薩藩の幹部と翁との謀議の菓が少し利を過ぎた。」とか、「その初め西郷、岩下等の人々と謀議したとき、西郷隆盛は多数の兵員を派遣するから十分

各所に活動せられたい」とか、「翁も落合も小島もそのつもりで計画を立て、四方に兵を出して活動を開始した」などは直助を計画の責任者、中心人物に仕立てあげる意図が明らかで、架空の物語りといわざるを得ない。まして「翁は約束した兵を送らぬ為、詮方なく、密かに薩邸を脱して単身上京し、岩下方平と兵員派遣について種々の打合せをなし周旋せられた(十二月二十日)」と述べるに至っては晩年の直助の記憶ちがえといふにはあまりにお粗末である。直助が薩藩三田邸を脱出したのは老年で、戦闘に役立たなかつただけである。

次に岩倉具視暗殺計画について直亮は四月二十七日の史談会口述で、英人の参内、つまり攘夷の停止という新政府の方針に憤慨して、それを覆すために機密に奔走した、その結論であると述べている。「直助翁」では全くこれと異り、本稿第一章の終りにあるように小島将満斬罪の復讐であるとして、翁の門弟数名の少壮者の間に岩倉暗殺の計画が企てられたとある。何故落合は復讐の件を一口も喋らなかつたのか。明治二十六年に至つても、赤報隊の事件は明治政府のタブーであつたのか。ともあれ、筆者は権田直助の晩年の追憶のなかで小島将満が次第に英雄化し、その思い出談に自己が活躍した場面が拡大されて、岩倉対面一場が芝居がかったのではないかとおもう。落合の口述には、この場に小島四郎はでてこない。小島将満追悼遺草の刊行とは別なことであるう。

藤川三溪は歴史の編修に興味をもち暫くその関係の官職に就き、その

間、維新史編集の史料を求めて直亮と接触し、借用記録をかえさず公の場で、悪口を言われることになつた。

まず三溪の年譜によつて修史関係の歩みをみよう。明治五年二月、太政官正院記録局編輯課御用掛となる。同七年辞職する。同八年太政官正院修史局三等協修に任ぜらる。同十年二月依願免官、三月修史館御用係となる。同十三年十月、山岡鉄太郎を経て「維新実記」を宮内省に献じて乙夜の覧に供す。

「この修史局というのは当時の記録によれば明治二年四月に設置され、同十年一月に廃止され、修史局は修史館と改名、同十九年一月修史館も廃されて、内閣に修史局が設置され、明治二十一年十月これも廃止されて東京帝国大学に臨時編年史編纂掛が置かれ、これが後の東京大学史料編纂所のはじめとなつた。」

三溪が三等協修に補せられたことは、修史局の官制をみると上に總裁、副總裁、次に局長、副局長あり協修にも一等から三等まであり、かれが三等協修に任ぜられたことは、如何なる事情にせよ不遇としかいえない。伝記著者桑田透一によれば「三溪は任官する毎に官等が下つていった。これに対する政府当局の真意は測りかねるが、三溪自身は一向無頓着だつたようである。国利民福をのみ念とするかれの胸中には官位の高下などは問題でなかつたらしい。その地位の如何を問わず、召し出されれば進んで滅私奉公の実を致し、己の後継者が出来上れば、屑く退いて自分は専ら民間の指導に当らうとした。これ惟うに三溪の極めて真面目な性格の一端を現すものであろうか。」とある。伝記作者として、こ

の時期に滅私奉公の三溪を描出しなければならなかったもので、このような誉めかたをしたのであろう。

要するにかれには官員の水が肌に合わなかったのであって、維新革命の怒濤のなかを走りぬけた明治人には一ヶ所に安住できず、転々として職を変える者が少くなかった。

三溪の場合豪放磊落、細事に拘泥せずといった気分が濃厚で、平穩な社会で孜々と努めるといった人物ではないようだ。

その逸話をみても日常生活の経済感覚は稀薄であつたらしく、生活に窮すると官職に就き、暫くすると嫌気がでて、さっさとやめてしまったのではなからうか。

三溪は落合直亮と同様筆まめで、奥羽征討の転戦激務の間にも絶えず手記を怠らず、これを「鎧縫日記」と名付けているが、維新の大業緒について閑地に就くと、これを基礎として、弘化三年、外国船の渡来から説き起し、明治二年の版籍奉還に至るまでの史実を、前後十二年にわたつて編修、これを「維新実記」と題し、明治十二年十月宮内省に献したことは前述のとおり、全部で百二十巻に亘る大冊であつた。

直亮の日記、書類借用の件は、これで合点がゆく、三溪は「維新実記」作成の史料として落合の記録を利用したのであろう。

口述を再筆する「其後追々同志の人々よりも聞、自分にも記憶して居ましたことを筆記して大体には完全にしたつもりでありましたが、其書をば明治六、七年頃に藤川三溪と云う人があつて、先帝の御代より（弘化二年から孝明帝の御代に至る）御一新になり、東北平定までの歴史が

出来るから、何んぞ書類があるならば出して呉れと云う事で御座りまして、其時分に右筆記を見せましたが、併し控がないから写して廻わそうと申し断りましたるに、そうは云わずに貸して呉れと云う事で、云わば強談に逢いまして終に本書を貸して遣りました。然るに其後、宮城の炎上に罹りまして其書を焼いたと云う事で御座りました。

併し藤川が云うには君が本書は焼けたけれども取るべき事は悉く御記録にのつたから、安心して呉れと云う事で、遂に其書は失いました。（中略）とあるが御記録にのつたか、三溪の「維新実記」に採用されたのかわからない。三溪の強談と書類紛失に釈然としない直亮の口吻がかわれる。

三溪が任官するごとに官等が下つていったという事実は今のべた無責任さともからんで何か、この人物に人格的な欠陥があつたのでないかと思わせる。

「三溪伝」末尾に三溪研究者、星野佐紀氏説として、明治新政府に参画してその敏腕を揮わなかつた原因として

- 一 傲岸不羈なりしこと。
- 二 薩長土肥の出身に非りしこと。
- 三 士分とはいへ比較的身分が低かりしこと。
- 四 有力なる先輩の推輓がなかりしこと。（沢三位は余り勢力のない人物であつた）

等が挙げられた。筆者も一、の三溪の人物がその人生航路を、世間の榮達からはなしてしまつたという点で同感である。

四 維新後の両者の業績

権田直助は明治六年、迎えられて大山阿夫利神社の祠官となった。これは阿夫利神社の神仏分離がうまくゆかず、祠官と僧侶の対立が深刻で、大山信仰全体の衰退を招いたので、直助の建設的手腕を期待して、平田系の神官の要望が実現したのであるが、直助が自ら喜んで大山に向いたわけではない。この間の直助の心境を伝記著者は次のように分析している。「翁としてはこの赴任について、喜びを以て、仕たり顔に應ぜられたのではなかったに違いない。其れは是れまでの翁の思想と言い、運動と言い、その国家社会に尽された事業が何れも天下国家を背景にしての堂々たるものであったのにひきかえ、一地方に偏在した神社の一祠官として赴任されるに就いては多少の感慨なきを得なかったに違いない。大山の如き僻地は言わば信仰者に取っては、その名も弘まっているとは言え、決して翁の晩年の最後の事業として行わうとせられた輝かしい場所としては見られなかったであろう。それにも拘らず就任されたことは、政府に対する国学者の勢力、又学界に於ける国学の類勢、特に皇朝医道にみきりをつけた翁は最早斯くなったこの大勢には再び起つて、これに対抗すべき激漉の氣象を建て直そうとする勇氣もなく、否、その勇氣はあったとしても、滔々たる欧米の東漸思想は、益々翁の精神から離れて往くのを見るに忍びず、幾多の感慨を胸に湛えて東京を去られたことと忖度する。」

平田系の神官達も破壊はしたものの、建設に就いては考えおよばなかった。熱情の流れるままに神仏分離を行ったものの、将来の方針に就いて確と見定めたわけでない。要するにそれだけの手腕のある人が祠職のなかに居なかった。

ここに期待された翁の事業が始まるのであるが、神社の諸事の整理、大山一山の立て直しには翁一流の細心な計画をもって改革を遂行したのであって、神社の経営についても、そのすぐれた翁の手腕が発揮された。

具体的に翁の仕事を見ると、まず神社直接の事業については、廃仏棄釈の跡始末があった。これを純神道化することは、もともと従来の神道が体系化されていなかったので神道の教養、学識あるものでも、これを整頓することは容易なことではなかった。神仏混淆のなかで陀羅尼を唱え、護摩をたき、六根清浄の戒を読むといったことから直してゆかなければならない。先ず祭典の形式、作法を神式に拠ることにし、神前に奏上する祝詞もすべて翁自ら草案をつくり、これを一定し、また神前の調度器も仏式を除かなければならず、多くの苦勞があった。

翁は祭典及び作法をまとめて祭典習礼小言と題し、冷泉為紀と京都北野神社宮司田中尚房の意見を求め、その校訂を経て公刊した。

翁のこの祭式作法が後世に至るまで神社一般に普及、伝習されて、その基本になったこと、仏教を分離した神道の純正な祭祀の形式を整えた功績は特筆されなければならない。

翁の大山における経緯は着々と実現したのであるが更に逸することの

出来ないのは、その間における翁の国文学の幅広い研鑽で、特に純日本式の文法、語彙をもって当時の学界に活動し、後、西洋文典からの比較研究による文法学が確立するまで、翁の研究成果が文法の標準を示す程の実績をあげたことも忘れてはならない。

明治十一年六月には国文柱（二巻）が刊行された。これは従来の研究では国文の組織法格が明らかにできず、作文の法格を正しく導き、その不足した部分を加えたもので、後に皇典講究所の教科書用として明治十五年に広く出版されるに至った。

さらに国文句読考、漢文和読例、語学問答、語学自在、形状言八衢等の語学の著書を次々と刊行し、学界に少なからぬ刺戟を与えた。

明治十五年には神道各教派が独立し、これと対立して皇典講究所が設立されたが、翁は神道、国学の先輩として同講究所文学部の教授に挙げられ、自著国文学柱が教科書に採用されたことはいまのべたとおりである。

しかし学問の進歩とともに翁の日本式文法も過去のものとなり、老大家として敬せられつつも、学界の中心的存在ではなくなった。

だが翁の思想、研究方法、その事業は次の時代の人々に影響をのこし、後年、物集、大槻等の積学が文法学を發展せしめたのも翁の研究の恩恵をうくるところが少くなかった。（主として「直助翁」による）

藤川三溪に「捕鯨図識」という著書がある。印刷、出版は明治二十二年九月となっているが、巻頭の序文は三溪が奥羽征討中に仕えた沢三位

（為最後日改名カ）
宣嘉で明治六年九月の日付、同じく征討中の知己清水谷公考も序文をかき、その日付は明治七年五月になっている。

従って同書が脱稿したのが出版の十数年前であったことがわかると共に、三溪の捕鯨にかけた情熱が並々でなかったことを証明している。

しかしかれの捕鯨の呼びかけには世間の人はかなり批判的で、援助をしないどころか、多くの非難がおこり、「山師」呼ばわりされた。清水谷公考の序文の一節に「開開洋社。創捕鯨法。雇漁手于英米。放成功号于北海。親試業于实地。」とあり、明治十九年刊行の「海国急務」には「明治六年官ニ乞テ開洋社ヲ開キ、英人ジョージ、米人スミツヲ雇テ捕鯨ノ業ニ就カシム。時ニ予乏シキヲ修史局ニ承ケ官事缺掌ヲ以テ其事ニ任スル事能ハス（凡官ニ在ルモノハ商法ニ管スル事ヲ得ス）因テ横田某（宗一郎）ニ托シテ社長トシ成功丸ヲ北海道ニ出ス。其船年ヲ経テ還ラス（定テ沈没）社事遂ニ廢ス今ニ至テ遺憾トス」とあつて捕鯨事業は失敗したらしい。

また下啓助氏の「明治大正水産回顧録」にも「水産学校を創設した程の人だけあつて早くから遠洋漁業に着目して船を出したことは確からしく、これが日本では最初の遠洋漁業の唱導者であつたと思う。（中略）しかし三溪氏は意見は有つて居つたが、自ら手を下した訳ではなかつた」と見えている。捕鯨に関連して小笠原開拓の建議を三溪がしばしばおこなつたが政府はその願いを容れなかつた。当時同島には外国人移住者が生活し、その処置が未解決で、徒らに国際問題をひきおこすのを恐れたからであらう。

捕鯨事業は三溪が一生を通じて実現を望んで已まなかったものであるが、時はかれに味方せず、その存命中に素志を貫くことができなかった。

三溪が単に机上の空論家でなく、自ら進んでその信ずることを実行するのは捕鯨事業に手を染めたことでわかるが、荒蕪地開墾も機会があれば盛んにおこなった。

明治十三年七月、千葉県山辺、武射、千葉、市原の四郡十三ヶ村の荒蕪地約百五十町歩を開墾した。

明治十六年には千葉県山辺郡大和田村へ移って報国社というものを興し、刑余者を雇って之をいたわり、不毛の地三百十町歩を開墾した。

翌年かれは千葉の村から東京に帰り、二十年には、多年の宿願であった水産立国を実現する為には人材の養成と、販路の開拓が必要であるとして、大日本水産学校の設立の計画をたて、認可を申請し、同年九月八日認可を得て十月から開校した。

校舎は芝山内九号地にある浄土宗の安養院をあて、四学年修了で、学課目は独英清の語学、航海数学、理化学、地理学、水産学、漁獵学、製造学、器械、兵式体操、船体運動の十科目に定め、自ら校長になったが、経営困難と人心不統一のため僅々五ヶ月で廃校の已むなきに至った。

しかし三溪はこれに屈せず、直ちに大阪に赴いてこの地に水産学校を設立した。何故に東京を去って大阪に地を撰んだか明らかでないが、水産講習所片山教授著「藤川三溪小伝」によれば、「氏の経歴は陸軍関係が深い。従って当時の大阪鎮台の高官連は、多くは氏の熱烈な後援者で

あったことが著書等から推知出来ること、更に氏の持説である水産人の養成と水産貿易とは不即不離でなければならぬ、それにはむしろ東京より大阪の方が地の利を得て居る、この考え方が東京の水産学校の失敗に続いて直ちに大阪に水産学校を新設したのではあるまいか」と推論を下している。

水産学校の徽章は蜻蛉であった。東京ではどの位入学者があったかわからないが、大阪では兎も角十数名在学したといわれる。「以上主として三溪伝による。」

なお三溪伝にはかれの人柄をかたる逸話、エピソードが多くべらべらているが、ここでは省略した。

権田も藤川も維新後の人生は世俗にいえば不遇であり、その尊王活動は国家から正当に評価されたとはいえない。だがこの人々には自分の望むところ、おもう存分に生きぬいたというおもしろいがある。明治人の気骨が脈打っている。かれらも広い意味で時代をささえた国事執筆者といつてよからう。

五 両者の著書目録

嘉永 元年	権田直助の著書 神遣方経験抄 (草稿)
天保 八年	藤川三溪の著書 春秋大義
四年	傷寒論綱領解
十二年	杖頭囊

安政	六年	古医方経験略	西游吟草	八年	美多麻廼布由教書	明治十九年	海国急務
安政	元年	古医方薬能略	東園遺草	〃	体用辞図解	明治二十二年	捕鯨図識
〃	二年	古医道脈伝	三溪抄叢	〃	国文学柱	〃	水産図解
〃	〃	古医方或問	自省抄	〃	神教歌譜	〃	三溪文抄
〃	〃	医按語類	拜日楼詩	〃	詞の通路頭注	〃	三溪詩抄
〃	三年	大同類聚方	皇国千字文	〃	詞の玉緒頭注	〃	礼儀一偶
〃	四年	西洋医説弁	竜虎要略	〃	温泉日記	〃	経国遠図
〃	〃	神医方抄伝	竜虎要略附図	明治十八年	語学期日伝習法	△	西洋軍器考
〃	〃	医師の一言	太平秘策	〃	論語助辞	△	東曆雕題事
〃	六年	大同類聚方攷	叩心論	〃	漢文和読例	△	徹桑談
〃	〃	備急方	錦旆余光	〃	祭典習礼小言	△	徹桑談外書
〃	〃	千重廼比登辺	鎧縫日記	〃	祭典習礼私記	△	考経考
〃	〃	八法歌	桜雁日記	〃	「著述年代不明の書物」	△	弟子訓
元治	元年	くすしのこととひ	山陰道鎮撫始末	〃	依夜民講義	△	西遊記
慶応	元年	神遣方経験抄或問	新史(慶応三年十月より起筆)	〃	仲景十二法考	△	遠遊詩草
〃	三年	養生答客問	東北略	〃	燈下慨言	△	尚書考
明治	元年	東行日記	撥反紀略	〃	形状言八衢	△	海錯帖
〃	三年	古医道沿革考	平潟口征討	〃	(明治十八年頃)	△	蘆中漁唱
〃	〃	経験略疫門口義	琉球事情	〃	皇朝医説(未定稿)	△	維新前記
〃	〃	古医道治則	復古外記	〃	体言分類(未定稿)	△	括囊録
〃	〃	古医道治則略注	孝明天皇紀略	〃	用言分類(未定稿)	△	漁撈新編
〃	〃	医道百首	盛徳史料及盛徳記	〃	語学自在	△	水産製造新編
〃	〃	薬品識名	戦史	〃	(明治十七年頃)	△	〃
〃	七年	諡号考	維新実記	〃	童蒙語学問答	△	〃
〃	〃	詞の経緯図	治安議議	〃	(明治十年頃)	△	〃
〃	〃	詞の真澄鏡	新策	〃	辞格例証	△	経義説(未定稿)
〃	〃	形状言五種活用	新策第二編	〃	てにをは品定め	△	士鑑(未定稿)
〃	〃	図批評	〃	〃	〃	△	〃

漢吳音略図

撥音仮名用例

文典弁疑

日本文典弁謬

皇国文軌

国文句読考

古伝概略

教書草稿

ふるものちり

靈魂帰着考証

みたまのふゆ

魂神氣略弁

心の柱

頭註挿図祭典式

葬儀式

阿夫利神社名義之

考

毎朝神拝詞

経世秘策

滞京日記

滞京漫筆

名越舎歌文集

和学説略図

小学日本文典

。神道大意

。教典十二章

。古語拾遺

。祝詞作文捷徑

(。印は所在不明)

(△印は所在及び年代不明のもの)

むすびに

落合直亮を含めてこの三者に共通するのは討幕活動中は勿論生涯にわたって多くの著述をおこなっていることである。

本稿にのべたように直助は神道、国学に、学問的研鑽を怠らず、三溪は政治経済に関心深く、要路に政治方策を上申して終生倦なかつた。

幕末、或る時期に処士の献言、上申が重ぜられ、すぐれた立言者が一流の志士として刮目された。直亮達の前半生の文筆活動はこの風潮と無縁なものではないとおもう。

身分の低い、大藩を背景にもたない尊王運動家が世に知られるには、これが唯一の方法であつたであろう。

徳富蘇峰は近世日本国民史のなかで、岩倉、大久保の決断がなければ維新改革は別な道をたどり、日本の近代化は成功しないか、著るしく時期が遅れたであろうと論じているが、たしかに岩倉、大久保、西郷等の討幕武力行動がなければ徳川氏があのように速かに、京都政権に膝を屈したとはおもわれない。だが革命には、それに共感し、それを支持する多くの人々の参加がなければその成功はありえない。この点、戦後の近代史家は維新改革のエネルギーを国民大衆の活動に、庶民の力に求め、これを高く評価した。

同時に筆者は岩倉、大久保のような指導者と一般庶民が果たした歴史的役割の中間に本稿にのべたような人々(懸命に維新改革に働きながら世

俗的には恵まれなかった人々)も近代日本の運命展開の担手として忘れてはならないとおもう。(伝記著者はかれらの生涯を挫折、不遇のものとして深い同情を示すのであるが、官員として栄達するのみが人生の優勝者ではない)

「日本の思想史講座(5)」で山口宗之氏は「わが国史上において、もつともテンポはやくダイナミックであった幕末維新史はたんなる觀念や思弁をもつてしてはつかみようがない。

したがってこの時代の思想史を論ずる場合、理念の流れのみをあとづけるに終つては、「事実」に遠いものとなる危険がある。

当時の複雑な状況の中に生きた人びとの具体的な行動のありかたを含めて理解しなければならぬ」とのべているが、具体的な行動を記録によって維新の軌跡を残してくれた人々を再評価する(皇国史観にバックするのでなく、)時期がきているのではないか。